

親役割に関する研究 (Ⅳ)

— 親であること (parenthood) と成人としての発達 —

河野利津子*

[はじめに]

一連の親役割に関する研究で既に述べてきたように、親研究の歴史は古く、特に米国などでは従来から社会学の領域であったが、父親(あるいは父性)の子どもの発達における役割に注目した研究は、主として1970年代以降である。専ら母親の養育態度を子どもの心理的・身体的発達のkey factorとしてきた源流に、「もう一人の親」として父親が「再発見」されて、子どもの健全な発達への貢献者として評価されるようになったのである。

我が国でも最近の親研究の関心領域は多岐に渡り、めざましいものがある。近年の多様化した家庭での教育力の低下の中で、母親の育児不安やノイローゼの問題、夫や仲間との共同(共有)育児や男性の子育ての推進、父性・母性を再検討するもの等々、親役割をあらためて問いつつ、現代社会にふさわしい親子関係のありようを求める研究が増えてきている。

前回取り上げた母親と父親の共同育児(coparenting)と性別しつけの関係は、次のように、家族システム論の立場から捉えた。つまり親のペアレンティング(親の関わり)は、家族システム全体の中で理解する必要があり、夫婦というサブシステムの関係の質が親子関係の在りようを大きく規定しているという考え方である。従来の父-子、母-子の二者関係からのみ捉えるのではなく、父-母-子の三者として捉える。つまり父母が個々に独立して親として子どもに影響するものと、親同士の関係が子どもに深く影響するものがそれぞれに存在するということでもある。

カップル(夫婦)が妊娠期を経て、親になる過程(transition to parenthood)では、性の異なる二人の親が子どもにかかわりながら、社会化いわゆるしつけをしていくのであるが、Cowanらの5領域構造

モデルの研究でも指摘されたように、産後の早期に夫婦は親としてのアイデンティティー、自覚等を男女別々にもつようになり、わずかに18ヶ月頃までに父母が男性、女性として異なった働きかけをしながら、子どもの性別しつけを強化していく。と同時に親自身も別々の性の親として夫婦を引き離していく潜在性をもつため、しつけの伝統化(traditionalization)あるいは性別化(sexualization)が進行していくというものである。

本稿では、前稿でとりあげたCowanらの親移行(transition to parenthood)研究等を踏まえて、親である者とそうでない者では、生涯を通しての人間発達という見地からどのような相違があるのかという問題意識に立って、親であること(parenthood)の意義を問いたい。親であることが成人の発達にどう影響するのか、親の人生において子育てはどういう意味をもつのか、さらに父親と母親は、具体的には親としてどう発達していくのか、などに焦点を当ててみたい。

今回の中心的テーマである、父性・母性を含めて親であること(=親性)の発達段階を明らかにすることは、成人としての親役割の本質を問い直し、子どもの発達に合わせて親自身も成長発達していくことを再確認する手だてとなると思われる。父親自身の、親としての発達=父性(fatherhood)の発達の研究については柏木(1993)の卓越したレビューがあるが、本論ではCowanらの人格発達の理論およびE.Galinskyの親の発達段階の理論を中心に、父親を含め、親の生涯にわたる成人としての変化・発達を「成熟(maturity)」と捉えて、その様相を考察したい。

1. 生涯発達の視点からみた親役割

ここ20年間の男性学研究の台頭により、望ましい父性(fatherhood)のあり方が模索されている。米国

* 幼児教育科

においては、理想的父親像の捉え方は、次のような史的変遷を遂げている。つまり稼ぎ手役割 (breadwinner role) → 道徳性の教師あるいは監督者 (moral teacher or observer) → 性役割モデル (sex role model) → 新しい養護的父親 (new nurturant father) への移行である。

1970年代以降、米国に於いては養護的な“new father”を良い父親のイメージとして捉えているが、それは主として親性の、より養護的 (nurturant) な次元に価値を置くようになったことを意味している。

親研究の長い歴史の中で、父親が積極的に子どもとかわる養護的な親としての評価がより高まるようになると、父-母-子という家族関係のシステムの中で、配偶者とのいわゆる夫婦関係や、父親の子どもの発達への影響が活発に議論されるようになったのである。親子関係あるいは、親であること (parenthood) の意味を、親自身の生涯発達の視点から捉え直すことの重要性が唱えられてきたということである。

Erikson (1963) や Levinson (1978) は成人の発達の概念を明らかにしたが、親が成長するということ、すなわち親になることにより、生涯にわたって、成人として望ましい健全な発達をしていくことが認識されるようになったのである。

40年に渡る縦断的研究を行った Snarey (1993) は、‘generative fathering’ という語を用いて、中年期の心理・社会的健康を発達させるにはペアレンティング (親としてのかかわり) が必要であること、父性行動は潜在的には満足のいくものであると同時に、要請の多い (demanding) ことだと認識しつつ、生涯的視点で生産的父性行動を高めることを強調している。

彼は父親の積極的参加は、短期的には父親の仕事-家庭葛藤や自尊心の低下というコストをもたらすが、このコストは全体的な親役割の満足感を低下させるものではないこと、そして、長期的には、職業的な移動性 (occupational mobility) すなわち職業上の成功へのインパクトや人格的成長としての社会的生産性、子どもの社会・情緒的発達のサポート等のプラス影響がみられると結論づけている。父親の育児参加は子どもや家族にとって重要であると同時に、父親自身の心理・社会的発達にとっても重要であることを強調しているのである。

2. E.H.Eriksonの発達課題と中年期の親性 (parenthood)

Eriksonは、生涯に渡る人間の心理・社会的発達を8段階で捉えて、最終的な目標は「人格の統合」とし

ている。第7段階である成人期の課題は「生殖性あるいは生産性 (generativity)」としており、包括的な意味で生み出すこと、すなわち世代から世代へと生まれていくあらゆるもの、子ども、事物、技術、思想、芸術作品などを生みだし育むことを意味する語として用いている。

彼はまた「成熟した人間は必要とされることを必要とする。成熟性は、産み出され世話を必要とするものから、激励は勿論、導きをも必要としているのである」と述べているように、成熟した大人は次の世代を生み育てて導いていくことを重要な課題としている。そして、その課題を達成しえなかった場合に獲得する停滞感についても次のように述べている。「豊かに成熟することに完全に失敗してしまうと、擬似的親密さを求める脅迫観念的要求へと退行し、しばしば停滞感と人格的貧困感の広がりを伴うことがある。その結果、人々はあたかも彼ら自身が自分の-あるいはお互いの-唯一の子どもであるかのように自分を甘やかす始める」と。しかしまた子どもを持つとか、欲しいと思う事実だけでは「生殖性」を達成できないとして、その理由を幼児期初期の記憶や極端な自己愛、あるいは乳児期の課題であった、人類に対する信頼の欠如ともいべきものにあるという。(Erikson, 1977)

「生殖性 (generativity)」を発達課題とする中年期は、子どもを生み育てる親=養育者として「世話 (care)」という徳を身につける。すなわちEriksonの言葉によれば、無援な状態で絶望的なサインを発している者を「愛撫」し、「大事に育て」たいという本能的衝動として世話が現れるのである (Erikson, 1989)。子どもの世話をする、また配偶者とそれを共有するという行為を通して親としてのコンピテンスである‘capacity for nurturing’を発達させると考えられる。

Eriksonのいう人生周期の最終である第8段階の課題、「自我の統合」については「物事や人々の世話を何とかし終えて、子どもの創作者になり、あるいは物や思想の生産者になることに付随する勝利や失望に適応してきた者-このような人間だけに、7つの段階の果実が徐々に実るのである。それを表現するにあたって、私は自我の統合にまさる言葉を知らない。」と述べている。(Erikson, 1977)

さらに基本的信頼感→自律→自発性→勤勉さ→同一性→親密さ→生殖性の獲得という課題を順次達成して、乳児期から前成人期に至るまでの過程で生み出された徳である希望と意志、目的と技術、忠誠と愛は蓄えとなって次の世代を育む力となるのである。(Erikson,

1989)

3. 男性の発達のgeneratorとしての父性 (fatherhood)

Lambら(1987)は、父親としての関わり(育児参加のレベル)には、1) engagementあるいはinteraction: 日常的世話や遊びなどの直接的かかわり 2) accessibilityあるいはavailability: 子どもの近くに並行的にいること、即ち潜在的な相互作用の可能性を含む 3) responsibilityあるいはmanagement: 実際的な関わりでなく、育児や世話に関する責任や監督、という3つのレベルがあると指摘している。

最新のPleck(1997)による関連研究のレビューによれば、1)の直接的関わりは、1980から90年代のそれらの研究の平均値から見ると、父親は母親の2/5時間(43.5%)、2)の並行的関わりは母親の2/3時間(65.6%)であり、1970年から1980年代初期のデータである1/3時間、1/2時間、と比較すると幾分か高くなってきているものの、母親に比べると全体に関わりは低い。

また、3)の育児の監督や責任については、1)の直接的関わりや2)の並行的関わりよりもさらに少ないという(McBride & Mills, 1993)。3)は保育施設の選択や手配なども含め、子どもの生活や学習に関する全般的な把握という管理的領域であるため、職業上、時間的制約が多い父親には不利な育児参加の領域と考えられる。しかしそうは言っても増加しつつある父親の家庭参加は、父親自身の子どもと関わりたいという動機づけの高さを顕わすと同時に、父性的なベアレンティングの重要性の認識の高まりをも顕している。

先に述べたPleck(1997)のレビューでは、積極的な父親の直接的関わり、すなわち乳幼児期からの子どもとの遊びや世話を通しての関わりは、父親の自尊心(self-esteem)、職業や結婚、親との関係など全体的な人生への適応、抑圧の低さ、親としての意識、子どもや親子関係の理解などの認識、などと関連が見られたという。

また、父親の育児技能や自信についての幾つかの研究でも、自分自身をよく関わっていると知覚する父親は、心理的にも子どもと強く関わっており、育児に関するコンピテンスも高く、子どもと親密に関係する能力について肯定的な信念をもっていたという(Barnett & Baruch, 1987)(McHale & Huston, 1984)(Russell, 1983)

結局、父親の積極的な参加は、働く母親の増加に伴

い、共働き夫婦においては葛藤は幾分見られるものの、夫婦で育児を共有しながらサポートする望ましい夫婦関係を形成したり、親密な父子関係により子どもの発達に好ましい結果をもたらす、父親自身の心理的健康、自尊心や感受性、適応能力などの人格的発達、親としての有能さやアイデンティティを高めるなど、社会的成熟の原動力になっていることが明らかであった。

先に述べたSnarey(1993)のfatheringと男性の発達に関する縦断的研究においても、乳児期-児童期-思春期に渡って積極的に子どもと関わった父親は、全般に、幸福な結婚生活と職業的成功とを手に入れていたのである。中年期の課題である「生殖性」に不可欠なことは、父親が子どものための全責任を受容する姿勢であり、育児を管理(manage)すること(Marsiglio, 1995)なのである。

4. 親になることの価値valueと犠牲cost

親であることによって、喜びや希望、満足感だけでなく、当然ながら忍耐や繊細さ、心配や葛藤、重圧感など様々な苦しみや悲しみも経験しなければならない。では、親であることは動機づけの側面で、どのような価値と犠牲を含んでいるのであろうか。夫婦と個人のレベルでみたRosenbaum & O'Leary(1982)の縦断的研究によれば、肯定的側面と否定的側面をそれぞれ3つ挙げている。まず、プラス(価値)的側面では、1)親としての有能さや能力(competency)及び達成や実現(fulfillment)-これは親として子どもの成長発達をともしながら子どもの素直さや新鮮さを経験することができる、あるいは子どもがいる方が人生がより幸福であり、子どもは家庭生活に興味と刺激を与えてくれているという見方である。

2)相互の依存的関係(mutual dependency)-子どもは親を尊敬し、親は必要とされる喜びを経験する、また子どもを介して夫婦間の絆がより強まり、老後には頼れる子どもたちがいるという安心感があるということ。

3)慣習的理由(conventional reasons)-子どもをもつことは自己定義(self-definition)の絶対的部分であり、男性と女性であることの一部であり、むしろもたないことの方が奇妙(odd)であるという、伝統あるいは当然だとする考え方による。

次に、マイナス(犠牲)的側面では、

1)拘束あるいは制限(restriction)-個人の自由が制限されてプライバシーが減少する、夫婦の時間がなく、旅行をしたり家をあけたりする自由がない、自分のしたいことが好きなときにできない、などである。

2) 子どもが引き起こす(原因である)否定的感情(negative-feeling)-成長につれて子どもがもたらす失望, しつけ, 教育などの問題によって生じる大変さや煩わしさ, 病気やけがの時の心痛など, である。

3) 望ましい世話ができないことへの心配(concerns)-子どもの健全な発達が保障できる環境を, 親や社会が提供できないなどの将来への悲観的見方, 親が若すぎて育児ができない, あるいは経済的に困難であるなど, を挙げている。

継続的に行われたHoffman(1975)のインタビュー調査に基づく報告では, 男女ともに, 子どもをもつことの不利点は, 第一に「自由の喪失」という側面, 第二に「経済性や費用」の側面, 第三に「(子どもの健康・安全・幸福などといった)伝統的な気苦労」の側面, 第四に「(育児・しつけに関わる)煩わしさや手間」を挙げている。

以上のように子どもをもつことは潜在的に肯定的・否定的両面の価値を含んでいる。出産・育児は, 一日中・一年中, 休むことのない継続的な肉体的および情緒的集中性を要するような労働集中的な性格をもっている。ゆえに親性は(parenthood)は, 成人期の発達の鍵と見なされるのであり, 同時に真の意味で‘大人(adult)’になることだといわれる所以である。

人はどうして親になろうとするのであろうか。Hoffman & Hoffman(1973)は「親にとっての子どもの価値」の中で, 人が子どもを欲しいと思う(親になりたい)理由を次の9つのカテゴリーにまとめている。

- ①親という立場と社会的アイデンティティーの確認のため
(社会制度の中で一人前に扱われる)
- ②自己の拡張
(子どもによって未来とのつながり, 永久不滅の感覚が与えられる)
- ③道徳価値の達成
(子どもを生み育てることにより善を為す)
- ④家族の創造
(夫婦二人以上の大きな家族としての絆の形成)
- ⑤刺激, 目新しさ, 楽しみ
- ⑥達成, コンピテンス, 創造性
(人間を生み出すことにより自己を誇りに思う)
- ⑦権力と感化(影響)
(子を親の影響と統制下に置くことができる)
- ⑧社会における比較と競争
- ⑨経済的有用性
(家族として援助して育てた後, やがて子は老いた親の世話をしてくれる)

これらの9つの要因は, 基本的には親としての心理的欲求に基づいているが, 同時に社会的・文化的・経済的要因にも影響されていることが分かる。また一般に, 親でない者との比較によれば, 親は子どもを, 大人であることや社会的なアイデンティティーの源泉として重要だと見なしている。また彼らは子どもを「自己の延長(拡大)」としてと同様に, 「人生の刺激や楽しみ」と考えていることが明らかであった。

5. 成人の成熟の基準としてのAutonomyとAffiliation

Cowanらと同様に, 妊娠期から親になるカップルを1,2,5歳時点まで継続的に調査しながら, Grossmann(1987)は, 親になる過程での成人の発達の側面をautonomy(自律性)とaffiliation(愛情または親密さ)という概念から検討した。

彼によれば, autonomy(自律性)とは, 他人とりわけ自己に重要な他者から分離させて, 特異な存在として, 分離した自己を自らの発達に重要と考える価値感覚のこと, また逆に, affiliation(親密さ)とは, 他人と関わる自己を重要と見なす考え方で, 他者に共感的で応答的でありそれを楽しむ自己が発達に重要であるという価値の感覚である, としている。すなわち従来の伝統的性役割観のいう女らしさの特質としての愛情や優しさに対して, 男らしさの特質としての独立や自立といった価値を指す。Gilligan(1982)のいう関係性や結合性をあらわす‘intimacy’と, 分離と分化をあらわす‘identity’の概念と一致すると考えられている。Grossmannらの研究結果によると, 育児にはaffiliationの方がより重要であること, 第一子の父親では, 自律的な(autonomous)父親の方が子どもとの関係はより良好であったこと, 親密な(affiliative)父親の方がより身体刺激の多い遊びの相手をよくしていたこと, 等を挙げながら, 概して男性の方が女性より自律性に優れていること, 成人男性の課題であるfatheringをうまく遂行するためには, 言い換えれば健康な親として機能するためには, 男女ともに分離(separateness)と調和(togetherness)の両方の特質が必要であることを強調した。

次の例は彼のインタビュー調査に参加した一児の父親の回答である。結婚における自律性と親密さ(愛情)の両方の重要性を述べている。

「ええ, 私にとっては誰かと暮すことは難しいことです。これは私が一人っ子で育ったことと何か関係があるかもしれないが, よく分からない。…私は多くの時間を一人で過ごせる-妻も, 性の相

手も、もちろん子どもがいなくてもです。でも、同時に、これらは全部自分に大切なものだと思う。もし自分が100%我がままで、自分が望むときにだけ妻を望み、子どもにいて欲しいときだけ望むことができればその方が自分には合っている。しかし、そんな結婚は続かない。結婚はバランスのとれた行為であるし、絶えずバランスをとることなのです。」(Grossmann, 1987)

6. 成人が親として「成熟する」ということ

Allport, G.W. は人格発達の一般的基準として、「成熟 (maturity)」という概念を提示した。彼は成熟の基準を、次の6つの特質として表している。

- (1) 自己意識の拡大
- (2) 他人との間に暖かい関係をもつこと
- (3) 情緒的安定／自己受容
- (4) 現実的知覚・技能 (および課題)
- (5) 自己客観視—洞察とユーモア
- (6) 人生を統一する人生哲学

そして、児童期から人生の終わりまで、これら6つの方向すべてにおいて、人間の可能性の発達をすすめることが健全な理論であり、健全な心理学である、という (Allport, 1968)。

家事や育児に積極的に参加するいわゆる “new father” は、大人として成熟していると言えるのであろうか。個人の発達を、〈自己概念〉と〈コンピテンス〉の側面から定義すると、自己概念には1) アイデンティティ 2) 統制の位置 (locus of control) 3) 自尊心 (self-esteem) があるという (Cowan, 1988)。

1) のアイデンティティについては、すでに確立している自己概念に「父親」の部分が加わり統合される。以前の職業生活中心の独立的で、攻撃的で、自己中心的なペルソナを家庭にそのまま持ち込むことをしないで他者のニーズを強く意識するような、保護的で共感的な親としての特質を強めるのである。家庭と仕事の場で別々の個人の特質を必要とすることは、父親になって意識する自我の部分である。

2) の統制の位置は、父親が役割に適應していく過程で、その位置は内側に位置づく。育児という要請の多い仕事に、親自身が生活のコントロールを失うかのような感覚に陥るが、物事に影響を与えることができるという感情やそれらが自分の統制内にあるか統制外にあるかを区別する能力を獲得していくのである。

3) の自尊心は、自分がどういう人間で、どのように周りの世界とかがわっているのかという自己概念の

評価の側面である。Cowanらの研究では、新米の親たちは男性・女性共に妊娠期から18カ月まで、否定的な変化が多いにもかかわらず、自尊心のレベルは驚くほど安定していたという。成人期の自尊心は、単に自己への良い感情やグローバルな能力ではなく、自己の短所・長所をわきまえてなお、自己を現実的に評価する能力と考えている。

また、親としてのコンピテンスには、1) 問題解決能力 (problem-solving) 2) 見通しをもつこと (perspective-taking) 3) 情動の調節 (regulation of emotion) 4) 活力／投入 (vitality／commitment) を挙げている。

問題解決能力は、新しい課題状況で自分の能力の範囲内で適切な資源を動員して即座に判断する能力であるが、ストレスの多い親移行期に次々と新しい挑戦や経験に遭遇するとき、新米の親たちは家庭と職場の両方で葛藤する要請 (ニーズ) を操り、決定を下し、明快に意志伝達する能力をあらわしていたという。

情動の調整とは、我が子の世話をしながら、あるいは配偶者を情緒的にサポートしながら、自己の衝動をコントロールする能力であり、成熟の指標と考えられる。伝統的に男性には強さが求められるため、男性が自分の脆さを気楽に話せる場は少ない。新米の父親の中には、子どもをもつことは感情に多く触れる経験であること、自己を開放することは心地よいことだと学んだものが多くいたという。

7. Galinskyによる親性の6つの発達段階

では、妊娠から子どもが生まれて巣立つまで、親はどのように変化・成長しつつ自らの親役割を果たしていくのであろうか。

Galinsky (1987) は、Eriksonによる乳児期から青年期までの発達課題を基礎に、子どもの発達段階に沿って親が発達していくプロセスを6段階で捉え、親性 (parenthood) の経験の具体と発達の様相を以下のように示したのである。

第一段階は「イメージ形成期」(the Image Making Stage) である。この時期は妊娠が分かってから出産までを指している。まず妊娠という事実を受け入れること、親になる心の準備をすること、出産の準備をすることが、主としてこの時期の課題である。親になることに関して、何が生じてくるのかイメージを形成／再形成することにより、自分自身と周りの重要な人との関係の変化について準備をすること。例えば、Galinskyによるこの時期の男女へのインタビューの中に次のような回答があった。

「僕のシャツは涙で濡れているが、泣きじゃくる赤ん坊をなだめ、子どもが泣き止んですっきり機嫌を直すまで、抱きしめている僕がいる」

〈父親になる予定の男性〉

「ちょうど歩き始めたばかりの子どもとスーパーから帰ろうとしている自分がある。駐車場から家まで遠くて、片手に買い物の荷物を、もう一方の手には子どもを抱えて坂道を上っている。」

〈母親になる予定の女性〉

上の例でも分かるように、妊娠という事実を肯定的に受け入れて、親になる準備をすることはまだ生まれていない赤ん坊への愛着、赤ん坊が自分とは別の人格であり、自分で生まれる用意（意志）があることへの理解をすることでもある。‘イメージはリハーサルである。’ ‘イメージは記憶を基礎とする’ といわれるように、初めて親になろうとする者は、自分の子ども時代を思い出し、自分が好きだった親の有りようや関係を中心として、「自分がなろうとする親」のイメージを形成していくようである。

つまり、大人に依存しないでは生きていけない非力な赤ん坊を産み育てるという行為を通して、親としての喜びや自信を核としたアイデンティティーを獲得しながら、成人としての自己を成長・拡大させていく。親性（parenthood）は、そのような絶えざる自己発展の機会を提供しているのである。

第二段階は「養育期（The Nurturing Stage）」である。これは、子どもが生まれて‘No’ と言えるようになるまでの時期といわれ、概ね0～2歳頃までを指すという。出産はどういうもので、赤ん坊や新米の親としてはどうかという自分のイメージを現実と比較している時期である。あるいは日々の追われる育児の中で世話や愛情をいつ／いかにあたえるべきか学習しながら、赤ん坊との愛着関係を形成していく時期である。

Erikson, E.H. (1963) のいう、この時期の発達課題は「基本的信頼感」である。親による愛情深い世話と保護の下で、愛されている自己と世界への信頼感を獲得すべき時期である。両親にとっては、先ず赤ん坊が自分たちのものであり、自分たちが親になったということを受け入れることが重要な課題となる。そして「自分はどのような親であるのか」「どのような親になりたいのか」を絶えず問いかけながら、アイデンティティーを確かなものにしていくのである。

Greenberg & Morris (1974) は “engrossment”

という語を用いて（involvementという表現以上に）親（父親）が自分の赤ん坊に魅せられ、夢中になる様をあらわした。愛着の形成のスタートには、自分と赤ん坊の顔つき、体格、性格（気質）などの類似や相違を発見して「私の小さい頃にそっくり」とか「おばあちゃんに似ている」などと我が子を通して自分を客観視したり、妊娠期から抱えてきたイメージ（想像）と現実を区別し始める。

この段階は、日々の育児を積み重ねながら、赤ん坊の生理の規則性、変化への適応性、反応への強度、情緒の安定度、活動の活発さ、などを通して個々の子どもの気質を知るようになる（Chess, Thomas & Birch, 1965）。と同時に、親もその過程で、自分自身をより深く知るようになる。そして、その時の親の赤ん坊への行為や反応は自己表出的（self-revealing）であるという。ある新米の母親による次のエピソードはそれを表している。

「昨晚赤ん坊に何かが起こったのか、彼は寝てくれず、私も一晩中彼のためにくたくただった。どうしたというのか私には分からなかった。次の日、私はこれとって何もせずポットしていると、段々苛立ってきた。赤ん坊に対して怒っているのではなかった。やっと2時間経って、私の怒りの原因は、赤ん坊が私を無力 helpless に感じさせていたことだと分かった。誰にも自分の弱点はあるが、私のはそれだった。どうしたらいいのか自分の無力さが、ただただ腹立たしかった。」

また、この時期は親にとって、これまでの自己の喪失、縮小、延期と表現することのできる「自己変革の時期」である。

赤ん坊が泣くと親が応える。赤ん坊が空腹を訴えたと、ミルク（母乳）を与える。一晩中目覚めていれば親も起こされる。両親には、かつての生活、あらゆる計画の能力が、日々のあらゆることが、全てこっさり去ってしまうような感覚に陥る。もし初めての母親ならば、やってくる瞬間瞬間に、赤ん坊をどう扱えばいいのか戸惑ってばかりだろう。つまらぬ雑事、ミルクを与える、おむつを取り替える、あやして寝かせる、等の仕事が永遠に続くような気がする。夜と昼の境すら分からなくなる生活。コントロールできる時間と能力は、期待しても手の届かないところに永遠に行ってしまったように思える。

親性への移行期は、喜びと悩みや不安などの新しい経験の連続であり、育児は予想以上に要請の多い (demanding) 仕事で、身体的にも精神的にも疲労が多い。この親への移行期に最も必要なのは、さまざまな種類の「サポート」である。周りの人々、とりわけ夫がどれくらい育児を分担して、さまざまな体験を共有できるかは成功の鍵要因であり、さらに友人や祖父母、会社の同僚や親戚の人々からも、何らかの支援を受けることが、育児責任を重圧に感じることなくスムーズに親役割を遂行していくために重要な要因である。

第三段階は「権威期 (The Authority Stage)」である。

これは子どもが2歳から4・5歳までの時期に当たる。親は、子どもに対して「どういう権威である (権威をもつ)」か、つまりどんなルールを与え、いつそれを強制し緩めるか等、親の権威について取り決めることが課題である。この頃になると、親であることの自覚は高まる一方で「どんな親なのか」ということを自ら問題にする。子どもは、移動性を獲得して、自分の能力の拡大を意識するようになり、自分の勇敢さや好奇心を試してみようとする時期である。「ボクもできるよ」「わたしがする!」と親に対して依存的であった状況から、少しずつ自立にむけて変化していく。

またこの頃の子どもは、次のような重要な発達課題を達成していく。例えば、直立歩行、言葉の獲得、トイレトレーニング、自分で食べる、着替える、弟や妹の誕生、保育園や幼稚園への入園などである。

親にとっては、必然的に「Stop (やめなさい)」や「No (いけません)」と行動を規制することが多くなる。すなわちこの時期に、親は「権威」という問題にしばしば直面せざるをえなくなる。

多くの親は役割への期待として、「厳格な躰け手 (disciplinarian)」であること、が求められることを周知している。しかし同時に、かつての自分が躰けられたように子どもを傷つけたり、意地悪をしたり、非合理的な扱いはすまいと思っているし、また外出先でよく見かける子どもを叩いたり、怒鳴ったり、腕をつかんで引きずり回したりする親にはなるまいとも思うものである。子どもが産まれる前は、人間的 (humane) で、穏やか (peaceful) で、尊敬される (respectful) 関係であろうと望んでいるのである。

それが実際には、いつも無条件の愛を注ぐことができたり、いつも子どもが「いい子」であるわけでもない。子どもはこれまでの段階とは異なり、親とは別々の (separate) 人格を持つ存在だと思えるようにな

り、自分の延長ではないということを理解し始める。

親は子どもに限界を知らしめ、それを守らせることが必要となる。つまりこの時期の主な課題は、親が「権威者 (authority)」になること、親の権威の範囲 (領域) を決めて示すことである。親の責任と子どもの責任は何かを明らかにすることである。

2歳から4・5歳は、Erikson の発達課題では『自律性』『主体性』の感覚の基礎を獲得すべき段階である。自分がイニシアティブをとるという感覚を育てるためには、権威による押しつけではなく、子どもを理解し意志の争いを避け、子どもが成長するにつれて親も変わらねばならないことをEriksonは強調する。その際、もう一人の親や祖父母、ベビーシッター、園の教師等とも同じ基準で、また自宅以外の公的な場所でもどう対処するかを明確にして、権威関係を成立させることが大切である。

健全なるアイデンティティーの発達のためには、親が権威者になることと同時に、子どもとの距離を獲得していくことも重要である。子どもは友達や先生など、親とは別の人との関わりの中で、自分の世界を広げていき、分離と再結合 (再会) を繰り返す。親は、子どもが自分の延長ではないことを確信させられるのである。或る母親は、子どもとの距離を象徴するような劇的な経験をしたと、次のように述べている。

4歳の息子とある誕生日パーティに呼ばれて、その席で、‘musical chair’ というゲームがあることを伝えられた。自分は幼い頃からパーティゲームが嫌いで、息子に大変すまないと感じていたが、息子は予想通りに輪から外れるのでなく、先頭を切って仲間の中央に走っていき、熱心にゲームに参加したのだ。それは、自分にとってとても意味のある出来事であり、息子は自分とは別の人格だとはっきり知らされた。

権威期には、親は権力 (power) という基本的な問題と取り組むのであるが、この問題のごった返しの関係の中から、両親と子どもの双方に、自己概念が形成され始めるとも言えるのである。

第四段階は、「説明 (解釈) 期 (The Interpretive Stage)」である。概ね5歳頃から児童期の終わり (ティーンエイジャーの入り口) 頃までを指す。この時期の子どもは、幼稚園を含め学校に入学することを契機として、一段と自分の周りの世界を広めていく。親の知らない友人とつきあい、親の知らない場所に出かけ、TVやラジオも見聞きし、本や新聞・雑誌にも

触れる。

この時期の親の課題は、子どもに対してこの現実世界（社会）を説明（interpret）すること、子どもに親自身を説明すること、および子どもの自己概念を発達させることに限らず、子どもの疑問に答えて彼らが必要としている情報や技能に近づけるよう、彼らに価値形成を援助すること、等を含んでいる。

この時期は、まず親が第三段階の親性を「再解釈」してどこに修正が必要か、さらにはもっと将来の親性のイメージを形成するために、「評価」することから始まるのである。幼稚園や学校がしばしばその引き金になる。例えば、「うちの子は学校でうまくやっていたのかしら？」「この学校はいい学校かしら」「先生はよく面倒を見て下さるかしら？」「うちの子に友達ができるかしら」等々。これまでの親としてのあり方や親子関係が問われてくるのであり、次の段階へ進むために振り返り復習することが即ち「評価」である。

評価には、当然ながら、親自身が親としての自分を見つめ直し、評価することも含んでいる。子どもが泣いたときや子ども同士の喧嘩の時の対処法、寝付けない子や朝早く目覚めた子へのあやし方も、また小さな手を伸ばしてきて親の手を掴んだときの感触や美しい色の絵を手渡してくれたときの嬉しさなども、親として‘現実的に’分かっているということ。そのような自分を‘良い母親’あるいは‘そんなに良くない親’だと評価するのである。また親は子どもにどのような印象を与えたいかについても考えるのである。たとえば子どもに優しい（好ましい）記憶を残したいと願っていた母親の一人は、次のように述べたという。

「子どもにガミガミ言ってしまった時、あるいは言うべきでないことを言ったとき、その後で、彼女の心を砕いてしまったから本当に心配なのか、私が悪く思われたくないからなのか、自分でよくわからないことがある。」

この段階の子どもの発達課題は、Eriksonによれば『勤勉さ』の獲得である。物事を生み出す、創り出すことを通して認識を獲得することを学ぶ時期である。親は学業達成についてさまざまに思いをめぐらせて、さまざまな教科で良い成績が取れるよう期待する。しかし、我が子についてのイメージと現実の我が子とを一致させること、すなわち子どもの個性の受容は、親性の過程においてずっと続く重要な課題である。例えば、ある母親は、

「我が子は一箇の人間である。彼は私が期待したり、予想したりする全くそのものの子どもではなく、彼独自の人間である。彼にこうして欲しいとか、これ以上に優れて欲しいとか、あの程度には良くできて欲しいとか望むことはできない。」

また別の母親は、次のように言う。

「彼に知的であって欲しい、クラスの人気者であって欲しい、運動も抜群で、音楽にも優れてなど望んだが、彼が全てできるはずもない。」

この時期には、子どもとの関わりのあらゆるところで、親は言語的にも非言語的にも説明することが求められる。そうしなければ、答えないか（意志）、あるいは答えることはできないか（不可能）という状況に置かれるのである。どのような事実を子どもと分かち合い、子どもにどのような行動や方法を教え、どの価値・道徳・信念を伝えたいか、を明らかにすることである。

例えば5歳児は朝のニュースを見て「どうして泥棒なんかいるの？ボクのうちにも来るの？」と尋ねる。8歳児は、学校から帰ると、「あの先生は何があったか知りもしないのに、いつもボクたちを怒鳴るんだよ」と告げる。あるいは10歳児は、友達を誘ったが忙しいと断られたためふさぎ込み、「私の方がいつも先に声をかけるのに彼女からは声をかけてくれない」とこぼしたりする、など。親は絶えずそれらに応じて、事実を説明し、問題の解決法を伝えていくことが求められるのである。

親子の関係は、子どもの成長とともに変化していく。以前の段階と異なり、子どもは親とは別の領域を切り開いて、より独立的に振る舞い、友達との関係を大切にしていく。親からの分離／結合のバランスが求められているのがこの段階の特徴である。例えば5・6歳時期には、親とは大きな権力の不平等があるが、12歳時期には親とはわずかな不平等の関係に移っていく。親には、この変化する関係・距離を調整するという課題がある。

親子の距離の調整については、子どもが家に居るとき居ないとき子どもの生活にどう関与するか、即ち分離／密接の領域を親が定義するという課題がある。子どもとの関係にいかに入り込むか、およびいつ手放して自分一人であることを励ますのか、という課題である。

第五段階は、「相互依存期（the Interdependent

Stage)]である。子どもが13歳頃からの、ティーンエイジャーである思春期にあたる時期である。第四段階の説明期はさほど荒れる時期ではないが、この段階は、いわゆる第一次反抗期に当たる権威期(2~5歳)に再び引き戻されたような感じがする。発達の初期に退行していくように思えるため、親として、家族として、育児に失敗したのではないかという痛みの感情が生じうる段階である。

この時期の親は、子どもの急激な変化に戸惑う。我が子のこれまでのイメージを消し去り、自分の知っている我が子に別れを告げ、なじみ深い我が子の身体に住んでいる殆ど知らない新しい我が子に慣れる困難に対処せねばならないのである。親自身は以前の自分の親としてのイメージが挑戦を受けていることに気づくのである。

ある17歳の少女は‘誰もが持っている’という特殊なブーツを欲しがっていた。両親は高すぎると言って拒否したが、その娘は「友達がくれたから」と言って履いて現れた。その後母親は自分の財布からお金がなくなっているのに気づいた。

親として統制が利かなくなってくるこの時期に、再び自問する、「どんな権威でありたいのか」「誰が限度(規則)を決めるのか」と。成熟と未熟の、半分大人で半分子どもの混合である我が子との権威関係を再構築すること、つまり、親は新しい課題の解決に向けて、子どもと意志伝達して関係を保つ能力や子どもとの距離の取り方を熟慮していかねばならないのである。

Eriksonによれば、十代の子どもは『同一性』の獲得を重要な課題としている。また心身の急激な発達は自らの性に対応する課題にも直面する。その時、親は我が子の性(sexuality)を受容することと同時に、自らの中年である現実をも受容せねばならない。我が子の生殖サイクルの開始に対して、親世代は生殖可能性の終焉を迎えようとしているという現実がある。青年期の異性の子どもとの関係はジェラシーと誇りに充ちているが、それは異性間だけではなく同性である父と息子、母と娘の間でも成立する。

また、‘ほとんど’大人である子どもとの新しい関係を形成するため、両親には夫婦と子ども達との一定の距離を保つという課題がある。近い将来には、子ども達のいない生活が待っているわけで、子どもとの別離への準備をも必要とする。

「私と夫は結婚前に一緒に住んだこともないし、

結婚一年ですぐ子どもは産まれて、ずっと子ども達が共通の目標でした。子ども達が居なくなればこのまま夫婦でいられるのかどうか分かりません。夫を愛しているのですが、それとは別です。何か新しい時期の到来です。」

「私は親であるが、もはや子どもが幼かった頃のように、“私の子を見て!かわいいでしょ。私が母親なのよ”などと所有の叫びをあげない。すでに子ども達は大きくなり以前とは違う関係です。私と同じくらいになり、既に人間(people)です。我が子は人間(people)なのです。」

この相互依存期では、親子関係を再定義することが課題であるが、新しい関係は対極に見える要素、つまり距離と親密さ/別離と結合、で構成されている。

第六段階は、「旅立ち(別離)期(the Departure Stage)]である。この時期は子どもの高校あるいは大学卒業、就職、結婚などを契機に、親の家から去る(独立する)子育ての最終段階を指している。親というものは、育児が始まった赤ん坊の段階から、子どもとの別離をイメージし続けているが、どの段階で子どもが親元を去っていくかは様々であり、末子が去るまでの期間は長期に渡る。

旅立ち期の親の主たる課題は、親性(parenthood)の体験の全体を通して自ら考えてみることで、実際にどういう出発(別離)になるのかイメージしてそれに適応していくこと、成長した子どもをもつ親としてのアイデンティティーを再定義して、親としての自己評価をすることである。

子どもの旅立ちはいつ、どういう形で生じるのかを予想しながら、準備することが必要となる。いわゆる“空の巣症候群”と呼ばれる、子育て終了後の空虚感にうまく対処していくことが重要である。自分の満足できる仕事や社会的な活動などコミットできる対象をもっていればその危機は容易に乗り越えられる。自由な時間をどうやって、何を優先させて過ごすべきか自らを問いながら、親としてのアイデンティティーの部分が縮小していく変化に適応せねばならないのである。或る母親は、次のように悲しみを話していたという。

「息子の結婚後、彼に自分の部屋から欲しいものがあれば持って行っていいわよと言っておいたら、ある日仕事から帰ってみると、息子はその申し出を受けて、部屋のは全て持ち去り、カーペットさえ剥がして行ってしまっていた。彼が残した

ものは、おもちゃのタンカーだけ。息子の部屋は空っぽになり、タンカーだけが部屋の隅に転がっていた。誰ももうここにはいない。私はただ寂しさに泣き通したのです。」

一端鋭い、軋むような別離の感情が落ち着くと、その非日常的な事柄が、あたかも正常のように感じられてくる。親は自らのアイデンティティーを再定義する課題に直面するのである。その定義の中で、親であることの部分が縮小すると、残された部分を見つめていくようになるのである。親である部分は、ジグソーパズルでいえば、自己概念の決定的なピースであるため、その喪失による再定義は実際は困難な課題である。そしてその克服は、それ以外の重要な人間関係、例えばパートナーである夫婦の関係を再確認して、カップルとしてのアイデンティティーを再定義することによってなされるのである。

最終段階であるこの時期には、親自身が自分たちの親性を、成功と失敗に選り分けて評価する課題があるが、子ども自身も、育てられた環境や方法について、客観的に評価する時期である。例えば或る母親は、結婚した娘が次のように話したことを述べている。

「私はこれまで政治や社会やいろいろな理論についても、何が正しくて正しくないのか、知識についての安心感が得られなかったが、それはお父さんとお母さんがしょっちゅう議論していて、滅多に意見が一致することがなかったからだと思う。だけど、二人の別々の言い分を聞きながら育ったことで、自分で考えることを強いられて、自分は幸いであったと思う。」

成人した子どもが「自分は恐らく子どもはもたないだろう」というのを聞くことほど親にとって残念なことはないかも知れない。それはもしかしたら、親の有り様や親のこれまでの投資を否定しているのであろうから。親は子どもに金銭（経済）、時間、骨折、思想、愛情といったあらゆるものを代償を求めず、与えて（投資して）きているのであるが、「果たしてそれは十分であったのか」と自問（評価）するのが親の常である。

親であること（parenthood）からは、子どもの独立と共に解放されるはずだが、親の心はいつまでも卒業できないことに気づく。親というものは生涯に渡って子どものことを愛し、気遣い、心配をして、その思いを止めることはないのである。親は、幼く依存的で

日々成長していく存在を慈しみ、愛情をもって世話する長い過程において、自己を失う。自己の再形成・再編成を繰り返すためののみ。

親であるものと親でない者（nonparent）は違いがあるのであろうか。親になって人は変わるのだろうか。Galinskyはその問いに“yes”と答えている。子どもをもたない者は、親が子どもに執着し、夢中（一心不乱）であることを憤り軽蔑するが、子を持つ親は、子どもをもたない者の他の事象への自己陶醉に憤る。親でない者は、親子の叫びにも似た言い争いを、避難の目で、耐え難いといった表情で眺めても、親であれば、その方法の善し悪しは別にしても、理解は可能である。また母親が幼い子に「野菜を食べれば、デザートあげますよ。」と告げる駆け引きを聞けば、我々もそう言っていたなどと思出す。父親ならば、10代の我が子からは10歩離れて歩かれて、あたかも他人であるかのように振る舞われる。どこかで赤ちゃんの泣き声がすれば、たとえ他人でも、落ち着いてはいられなくなるのが親というものであろう。

子どもを産み、慈しみ育てていく過程において、親は子どもを我が身の分身でありながら、一個の別の人格として尊重すべきことを学んでいくのである。その長い過程において、親はその命に責任を持つこと、他者を受容すること、寛大であることなど、「成熟した」大人として必要な資質を獲得しつつ、生涯に渡る人格的な成長をするのである。

[おわりに]

人が親になることはごく自然の現象であると考えられるが、その過程でどのような人格的な変化や発達が生じるのだろうか。今回はそのような問題意識から、1970年代以降発展している親研究の諸成果を手がかりに考察してきた。その結果、親であることは生涯に渡る成人の発達のための“key factor”であること、とりわけ人との関わりを中心とする心理・社会的側面での大人としての人格的「成熟」という視点から欠くことのできない営みであることが明らかであった。「父親の再発見」(Lamb, 1975)以来、父親の子どもの発達の影響が積極的に評価されるようになってきたが、父親の生涯にわたる人格発達においても子どもは重要な存在であることをあらためて確認させられたと言える。

【引用・参考文献】

オールポート、G.W.著 今田恵監訳『人格心理学』
上・下 誠信書房、1968 (Allport, G.W., Pattern

- and Growth in Personality, Holt, Reinhart & Winston, 1961)
- Barnett, R.C. & Baruch, G.K., "Determinants of Father's Participation in Family Work," *Journal of Marriage and the Family*, 49, Feb., 1987, pp.29-40.
- Bronstein, P. & Cowan, C.P. (eds.), "Fatherhood Today: Men's Changing Role in the Family." John Wiley & Sons, 1988.
- J.ベルスキー&J. ケリー著 安治嶺佳子訳『子どもをもつと夫婦に何が起るか』草思社 1995
- Chess, S., et al., "Your Child is a Person" NY: Viking, 1965.
- Coltrane, S., "Family Man," Oxford University Press, 1996
- Cowan, P.C., "Becoming a Father; A Time of Change, an Opportunity for Development" In Bronstein, P. & Cowan, C.P. (eds.), "Fatherhood Today; Men's Changing Role in the Family," John Wiley & Sons, 1988.
- Cowan, C. & Cowan, P., "When Partners Become Parents; The big life change for couples," Basic Books, 1992.
- Cowan, C.P., Cowan, P.A., Heming, G. & Miller, M.B., "Becoming a Family: Marriage, Parenting, and Child Development," In Cowan, P.A. & Heatherington, M. (eds.), *Family Transition*, LEA, 1991.
- E.H.エリクソン著 仁科弥生訳『幼児期と社会 I』みすず書房, 1977. (Erikson, E.H., *Childhood and society*, 2nd ed. NY: Norton, 1950)
- E.H.エリクソン著 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル, その完結』みすず書房, 1989
- D.J.レヴィンソン著 南博訳『人生の四季—中年をいかに生きるか』講談社, 1980. (Levinson, D. J. et al., *The Seasons of a Man's Life*, NY: Knopf, 1978)
- Galinsky, E., "The Six Stages of Parenthood," Addison-Wesley, 1987.
- Gilligan, C., "In a Different Voice," Harvard University Press, 1982.
- Greenberg, M. & Morris, N., "Engrossment: The Newborn's Impact upon the Father," *American Journal of Orthopsychiatry*, 44, pp.520-531, 1974.
- Griswold, R.L., "Fatherhood in America," Basic Books, 1993.
- Grossman, F.K., "Separate and Together: Men's Autonomy and Affiliation in the Transition to Parenthood," In Berman, P.W. & Pedersen F.A. (eds.), *Men's Transitions to Parenthood*. LEA, 1987.
- 林道義著 『父性の復権』中公新書, 1996.
- Hoffman, L.W. & Hoffman, M., "The Value of Children to Parents," In J.T. Fawcett (ed.), *Psychological perspectives on population*, NY: Basic Books, 1973.
- Hoffman, L.W., "The Value of Children to Parents and the Decrease in Family Size," *Proceedings of the American Philosophical Society*. 119 (6), 1975.
- Hood, J.C. (ed.), "Men, Work, and Family," Sage, 1993.
- 星野命・青木孝悦他著, 『オールポート パーソナリティの心理学』有斐閣 1982
- 柏木恵子編著 『父親の発達心理学』川島書店, 1993
- 柏木恵子著 『親の発達心理学』岩波書店, 1995
- 柏木・中野・牧野編著 『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 1996
- M.E.ラム, 久米稔監訳, 『非伝統的家庭の子育て』家政教育社, 1993
- Lamb, M.B., Pleck, J.H. & Levine, J.A., "Effects of Increased Paternal Involvement on Fathers and Mothers," In Lewis, C. & O'Brien, M. (eds.), *Reassessing Fatherhood: New Observations on Fathers and the Modern Family*, London: Sage, 1987.
- Marsiglio, W., "Fatherhood; Contemporary Theory, Research, and Social Policy," Sage, 1995.
- McBride, B.A. & Mills, G., "A Comparison of Mother and Father Involvement with their Preschool Age Children," *Early Childhood Research Quarterly*, 8, 1993.
- McHale, S.M. & Huston, T.L., "The Effect of the Transition to Parenthood on the Marriage Relationship," *Journal of Family Issues*, 6, 1985.
- Michaels, G.Y., "Motivational Factors in the Decision and Timing of Pregnancy," In G.Y. Michaels, & W.A. Goldberg (eds.),

- The Transition to Parenthood: Current Theory and Research, Cambridge University Press, 1988.
- 西平直喜著, 『成人になること』東京大学出版会 1990
- Parke, R. D., "Fatherhood," Harvard University Press, 1996.
- Pleck, J.H., "Paternal Involvement: Levels, Sources, and Consequences," In M.E.Lamb (ed.), *The Role of the Father in Child Development*. NY: John Wiley & Sons, 1997.
- Robinson, B.E. & Barret, R.L., "The Developing Father," NY: The Guilford Press, 1986.
- Russell, G., "The Changing Role of Fathers?," University of Queensland and Press, 1983.
- Snarey, J., "How Fathers Care for the Next Generation," Harvard University Press, 1993.

(受理 平成9年10月31日)

Abstract

A Study on Parental Roles (IV)

— Parenthood and the Development as an Adult —

Ritsuko KOHNO*

It has been recognized throughout the world that fathers are just as competent, sensitive and responsive caretakers as mothers from infancy and toddlerhood. In this context, it is significant to note that fathers, as well as mothers, are important facilitators for child development, and, at the same time, children help their parents to grow as adults throughout their lifetimes.

This paper examines the developmental processes of parenthood and the parent-child relationship from the life-span developmental point of view. What happens to fathers or mothers when they become parents? What does parenthood mean to them? How do parents change or grow in accordance with their children's development? All these questions are posed for solutions.

It has been made clear, from the theoretical grounds of adult personality development of E. H. Erikson and G. W. Allport, that parenting behavior or parenthood is the key factor for the sake of adult life-long development. The empirical or experimental studies done in the 1970's to 1980's also proved that parenthood (being a parent) is a significant, essential experience for healthy, psycho-social development of adults.

(Received October 31, 1997)

* Department of Early Childhood Education